

# 中川一政美術館

## 概 要

1. 名 称	真鶴町立中川一政美術館
2. 所 在 地	神奈川県足柄下郡真鶴町真鶴 1 1 7 8 - 1
3. 所 有 者	真鶴町
4. 所 管 課	真鶴町教育委員会
5. 事業経緯	<p>美術館は中川一政画伯より真鶴町へ作品の寄贈を受け、覚書を交わし、平成元（1989）年3月2日に開館。</p> <p>中川一政は平成3年（1991）に亡くなったが、没後もご遺族や関係者より度々作品の寄贈を受け、自作と一政旧蔵の美術コレクションをあわせると、現在の収蔵点数は約 850 点。年間3回から4回のテーマ展示を企画し、展示ごとに作品を入れ替え、油彩画を中心に常時約 60 点前後の作品を展覧している。</p> <p>また、一政こだわりの茶室や別棟の真鶴のアトリエ（復元）現在に至る。開館 38 年を向かえる。現在、アトリエは非公開。</p> <p>※令和7年（2025）より運営方針の見直しと建物修繕のため臨時休館中</p>
6. 建築内容	<p>敷地面積 2835.46 m<sup>2</sup></p> <p>壁式鉄筋コンクリート造2階建 一部木造</p> <p>建築面積 630.71 m<sup>2</sup></p> <p>延床面積 903.93 m<sup>2</sup></p> <p>1 階面積 606.70 m<sup>2</sup></p> <p>2 階面積 297.23 m<sup>2</sup></p>
7. 基本情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開館時間 10：00～16：00 （入館は 15：30 分まで）</li> <li>・観 覧 料 大人一般 800 円 団体 20 名以上 700 円 高校生以下 無料</li> <li>・休館日 水・木曜日</li> <li>・駐車場 13 台（無料）</li> <li>・交通 東海道線真鶴駅よりバス 15 分（中川一政美術館下車）</li> </ul>
8. 条 例 等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・真鶴町立中川一政美術館運営基金条例</li> <li>・真鶴町立中川一政美術館条例</li> <li>・真鶴町まちづくり条例</li> <li>・自然公園法</li> <li>・神奈川県立自然公園条例</li> <li>・神奈川県土地利用調整条例</li> </ul>
9. 地区区分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然環境地区（真鶴町まちづくり条例）</li> <li>・第三種特別地域（神奈川県立自然公園条例）</li> </ul>

## 概要

### 中川一政について

中川一政は、明治 26 (1893) 年 東京の本郷で生まれた。少年時代から文学少年だった一政は、若山牧水らが創刊した雑誌「創作」に短歌を投稿し入選、日刊紙「萬朝報」に短編小説「椎の樹」が当選し紙上に掲載されるなど、その才能を開花させ、芸術世界への扉を叩くこととなった。

東京の錦城中学校を卒業後、兵庫の芦屋に滞在した際、神戸の港で友人からイギリス製の油絵具一式をもらった。また、この頃愛読していた文芸雑誌「白樺」に掲載された、ゴッホやセザンヌの作品に触発され絵画にも関心を寄せることになった。

芦屋滞在中、初めて本格的な油彩画を描いた。これがデビュー作の《酒倉》(当館所蔵品)である。大正 3 (1914) 年、一政は《酒倉》を巽画会第 14 回展に出品し、審査員をしていた岸田劉生に推薦され、入選を果たした。一政は大いに励まされ、翌年の巽画会第 15 回展にも《霜のとける道》《監獄の横》などの油彩画を出品し、この年最高賞である二等賞を受賞した。この出来事をきっかけに画家として生きていくことを決意した。

大正 4 (1915) 年、一政は岸田劉生の組織した「草土社」(そうどしゃ)の創設メンバーに加わった。また、大正 11 (1922) 年には院展の洋画部と合併して創設された春陽会に客員として参加した(翌年に会員となる)。春陽会には、岸田劉生、梅原龍三郎、木村莊八、萬鉄五郎、石井鶴三といった当時の日本洋画壇を代表する画家たちが創設に加わった。春陽会には生涯にわたって所属し、後進の指導にあたるなど、多大な影響を与え続けた。

### 中川一政と真鶴

中川一政は戦後、昭和 24 (1949) 年にこの真鶴の地にアトリエを構えた。しばらくは東京と行き来していたが、最終的にはここを創作活動の拠点とした。

一政は、真鶴のアトリエから歩いて 15 分程の距離にある福浦(湯河原町)の風景に魅せられ、福浦の港を「日本一のアトリエ」と呼び、以後、17~8 年近くに渡り福浦の堤防に画架を置いて、数多くの風景画の制作に励んだ。

しかしながら、時代の流れとともに福浦港も様変わりすることとなった。港はコンクリートで固められ、建物も鉄筋建てのものが目立ち始め、一政は福浦を離れることを決意した。

そして、次の写生地を求めて近隣を巡り、たどり着いたのが「箱根」の風景である。箱根の中でも名峰、「駒ヶ岳」に魅せられて、昭和 42 (1967) 年から約 16 年の間におよそ 40 点の《駒ヶ岳》を描いた。

中川一政は「現場主義」の画家である。生涯、写生地に画材を運び、現場で風景を描くことにこだわった。戸外での制作は天候や季節などに左右されることも多く、一筋縄ではいかないことが多かったようである。常に自然に挑み、自然を感じながら描く日々が続けた。

90 歳を超えると次第に屋内での創作が増え、アトリエ内で「薔薇」や「向日葵」「椿」などの静物画を盛んに描いた。静物画を描く際は、必ずモチーフとなる花や果物、壺などを目の前に据え「現物」を写生することにこだわった。自身の絵にあうようにデザインした額縁にも豊かな感性が表れている。

一般的には洋画家として知られている中川一政だが、油彩だけでなく、岩絵具を用いて描かれた「岩彩」と呼ばれるジャンルの作品群「書」「陶芸」さらには新聞小説の「挿画」雑誌や本の「装丁」など幅広い領域で創作活動を展開し、作品を残している。

当館は画家本人より真鶴町へ作品の寄贈を受け、平成元(1989)年に開館した。

中川一政は平成 3 (1991) 年に 98 歳を目前にして亡くなったが、没後もご遺族や関係者より度々作品の寄贈を受け、自作と一政旧蔵の美術コレクションをあわせると、現在の収蔵点数は 850 点に上る。年間 3 回から 4 回のテーマ展示を企画し、展示ごとに作品を入れ替え、油彩画を中心に常時約 60 点前後の作品を展覧している。また、一政こだわりの茶室や別棟の真鶴アトリエ\* (復元) も見学ができる。開館 38 年を向かえる。

叙情的な作風の初期の油彩画や躍動感に満ち色彩鮮やかに描いた晩年の絵画作品、ユーモア溢れる書や陶芸作品など、多彩な作品を通じて中川一政の画業や人柄を感じ、その芸術世界を堪能できる。

## 入館者数

年度	入館者数	入館料実績
2025	0人(休館)	0円(休館)
2024	5,223人	2,479,270円
2023	4,997人	2,421,990円
2022	5,144人	2,336,630円
2021	3,524人	1,874,110円
2020	3,622人	1,656,580円

## 物販売り上げ 過去5年

年度	物販売上実績
2025	156,960円 ※美術館休館のため出張・委託販売の売上
2024	1,034,310円
2023	1,148,849円
2022	822,360円
2021	576,930円
2020	493,550円